

日本独文学会
2022年春季研究発表会

研究発表要旨

2022年5月7日（土）・5月8日（日）

第1日 午前11時より

第2日 午前10時より

会場 立教大学池袋キャンパス

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

E-Mail: tagung2022rikkyo@jgg.jp

参加費

会 員 無料

非会員 1,500円

日本独文学会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-34-6 南大塚エースビル603

Tel./Fax: 03-5950-1147

E-Mail（メールフォーム）：<http://www.jgg.jp/mailform/buero>

2022年5月7日（土）・8日（日）
春季研究発表会（立教大学）に参加される皆様へ（お願い）

- 感染した場合、濃厚接触者となった場合、そのほか発熱等の風邪症状や味覚・嗅覚異常などがある場合、体温が 37.5℃以上ある場合は、大学構内へ入構できません。詳細は下記の立教大学の新型コロナウイルス感染症への対応をご参照ください。
<https://www.rikkyo.ac.jp/covid19/> （日本語）
<https://english.rikkyo.ac.jp/covid19/index.html> （Englisch）
- 大学構内、会場内では必ずマスクを着用し、常に一定の身体的距離を保つようにしてください。
- 会場内での食事はご遠慮ください。飲み物を取っていただくのは構いませんが、感染対策に十分ご配慮ください。
- 会場外にて飲食をされる際には、各自で十分に感染防止対策を取っていただき、大人数での会食はなさないようお願いいたします。
- 研究発表会における録音・撮影・録画・オンライン配信は、固くお断りいたします。

Bitte an alle Teilnehmenden der Frühjahrstagung an der Rikkyo Universität
Betreffend Samstag 07. und Sonntag 08. Mai 2022

- Es ist Ihnen nicht gestattet, das Universitätsgelände zu betreten:
sollten Sie mit Covid 19 infiziert sein oder engen Kontakt mit einer infizierten Person gehabt haben,
sollten Sie Erkältungssymptome wie Fieber oder eine auffällige Veränderung in Ihrer Geschmacks- oder Geruchswahrnehmung haben,
sollte Ihre Körpertemperatur 37,5°C oder mehr betragen.
Informationen zu Maßnahmen der Rikkyo-Universität, um einer Verbreitung des Coronavirus entgegenzuwirken, finden Sie auf den folgenden Webseiten.
<https://www.rikkyo.ac.jp/covid19/> (日本語)
<https://english.rikkyo.ac.jp/covid19/index.html> (Englisch)
- Bitte beachten Sie, dass am gesamten Veranstaltungsort, also auf dem Campus und in den Gebäuden und Räumen der Universität, das Tragen einer Maske obligatorisch ist. Achten Sie bitte auch darauf, den empfohlenen Abstand zu anderen Personen einzuhalten.
- Bitte essen Sie nicht am Veranstaltungsort. Sie dürfen gerne etwas trinken, sind aber gebeten dabei Vorsichtsmaßnahmen zu treffen, um eine Übertragung von Covid 19 zu verhindern.
- Wenn Sie außerhalb des Konferenzgeländes essen oder trinken, treffen Sie bitte selbst angemessene Maßnahmen zur Vermeidung der Infektionen. Sie sind auch gebeten, nicht in großen Gruppen zu essen.
- Die Aufnahme von Fotos, Ton- und Videoaufnahmen sowie die ungenehmigte Verbreitung von Materialien der Tagung und der dort stattfindenden Präsentationen sind strengstens untersagt.

第1日 5月7日(土)

シンポジウム I (14:00~17:00)

A 会場 (8号館・8101室)

統治／抵抗の技法——戦間期ドイツ語圏における諸「装置」の研究——

司会：宮下 寛司

1. 判子をもらいに行く／失業中である——クラカウアー「職業紹介所について」の装置論的試論 深澤 一輝
2. 恐慌と祝祭——ベンヤミンにおける映画観客群集 菅谷 優
3. 舞踊美学の裏面 宮下 寛司
4. 神秘体験としてのスポーツ——ミュージル『特性のない男』におけるスポーツをめぐる近代人の葛藤 宮下 みなみ

口頭発表：語学・ドイツ語教育 (14:00~16:35)

B 会場 (8号館・8201室)

司会：坂本 真一・小林 大志

1. ドイツ語から見たゲルマン諸語の属格修飾語と所有表現——言語の発達サイクルとリサイクル—— 清水 誠
2. 派生動詞の構造複雑化と分布変化 黒田 享
3. *Gendern im DaF-Unterricht in Japan: Ein Praxisbericht* Ruben Kuklinski
4. ドイツの小学校ドイツ語科の学習指導要領において移民背景を持つ子供の出自言語に付与されている意義の分析 小西 優貴

ドイツ語教育部会招待講演 (16:40~18:10)

B 会場 (8号館・8201室)

日本の外国語教育への「CEFR-CV (CEFR 補遺版)」のインパクト

真嶋 潤子 (大阪大学名誉教授、ケルン大学客員研究員)

ブース発表 (14:40~16:10)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

C 会場 (8号館・8202室)

YouTube を活用したハイブリッド型授業構築の試み——コロナ後の初修外国語教育の可能性を探る—— 川村 和宏 (共同発表者：熊谷 哲哉)

ポスター発表 (13:00~14:30)
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

D 会場 (10 号館・X201 室)

Vergleich der Interessensbekundungen Studierender vor und nach Beginn der Corona – Pandemie
und Vorstellung von SRS-Lernapplikationen
Lars Bauer

E 会場 (10 号館・X204 室)

Verwendung von YouTube-Videos im japanischen Deutschunterricht
Axel Harting

第 2 日 5 月 8 日 (日)

シンポジウム II (10:00~13:00)

A 会場 (8 号館・8101 室)

発話を越えたところに及ぶ文法の可能性：話し手指向性と聞き手指向性

司会：森 芳樹

- | | |
|--------------------------------|------------|
| 1. ドイツ語の副詞節および補文の統語構造と意味論 | 伊藤 克将・森 芳樹 |
| 2. ドイツ語命令文に於ける聞き手の統語的実現 | 藤井 俊吾 |
| 3. 日本語の副詞モウの超過用法と感嘆文 | 宮田 瑞穂 |
| 4. ドイツ語の sein + zu 不定詞における経験者項 | 高畑 明里 |

口頭発表：文学 I (10:00~11:55)

B 会場 (8 号館・8201 室)

司会：新野 守広・馬場 大介

1. ドイツ語圏のサイエンス・フィクション (SF) における物語られた出来事の連続と時空間——ルートヴィヒ・アンツェングルーバーの暦物語『石割りハンスのメルヒェン (Die Märchen des Steinklopperhanns) 』 (1874/1880) を例に
徳永 菜摘野
2. 『ツァラトウストラ』におけるニヒリズムの問題——超人と永遠回帰思想をめぐる一考察——
網谷 優司
3. 「父の不在」の不在——ペーター・ヘルトリング『ヘルダーリン』の伝記批判的方法
益 敏郎

口頭発表：文学Ⅱ（10:00～11:15）

C会場（8号館・8202室）

司会：吉田 治代・松原 文

1. Das fremde Irren, das sind wir – Robert Musils *Der Mann ohne Eigenschaften* und Gerhard Roths Werkzyklen als Schwellenkunde einer stummen Verrücktheit zwischen literarischem Wahn und primitivem Sinn
Manuel Philipp Kraus
2. Koloniale Erinnerungskultur. Kalendergeschichten aus der Südsee
Thomas Schwarz

ポスター発表（10:00～13:00）

（ポスターは期間中を通じて掲出されています）

D会場（10号館・X201室）

E会場（10号館・X204室）

第1日目5月7日(土)

シンポジウム I (14:00-17:00)

A会場(8号館・8101室)

統治／抵抗の技法——戦間期ドイツ語圏における諸「装置」の研究——

司会：宮下 寛司

全体要旨

本シンポジウムは、「装置 (Dispositiv)」という方法論を共有し、戦間期ドイツ語圏の複雑化した社会の諸相について新たな観点を提示する。

フランスの哲学者ミシェル・フーコーは、『性の歴史』シリーズにおいて装置をそれまでの系譜学的研究を超えるものとして構想していた (Foucault 1978)。その定義に従えば、装置は歴史のある時点における社会の緊急課題を解決するために編成されるネットワークを指す。そこには言説のみならず、非言説的なもの(制度・行政措置などの諸実践)という互いに不均質な要素も包含される。また彼は、権力を社会の領野に偏在するネットワークとして捉えており、装置の諸要素はこの権力関係によって結び付けられる。この考え方からすれば、社会における個人もまた装置の一要素であり、個人の主体化 (Subjektivierung) は権力関係の効果として生じるのである。社会の諸個人間に現れる関係性としての権力モデルは、支配者による一方向的な権力の行使を必ずしも前提としない。それゆえに、権力の抑圧に対して抵抗を企てることで全き自由が獲得されるという考え方に、フーコーは慎重であらざるをえなかったのである。ただし、彼は個人の自由を否定していたわけではなく、その可能性を模索してもいた。彼にとって個人の自由とは、自らの主体化のメカニズムを批判的に思考し、それに対して距離を取ることで初めて実現されるものである (Foucault 1984)。すなわち自由の実践としてまず反省的思考が求められるのだ。装置に関する研究は、主体化メカニズムを様々な要素との繋がりから描き出すので、フーコーの目指す自由のための批判的思考を可能とする視座を与えることができるだろう。

フーコーの装置概念については、装置の変容可能性や個人の主体化・自由といった観点を中心に、哲学者たちの間でも多様に検討されてきた。社会学・美学・演劇学や文学研究でも装置が方法論として取り入れられ、フーコーが遺した主体とその自由という課題に取り組む研究が増えてきている。本シンポジウムはこれらを参照しながら、戦間期ドイツ語圏の社会・文化・政治を広い視野で捉え直し、この時代の諸相についてこれまで述べられてこなかった新たな側面を見出していく。まず深澤が当時の逼迫した課題であった失業者という問題をクラカウアーのテキストから論じ、失業者はどのような実践において主体化され言説化されていくのか、その過程を追う。続いて菅谷はベンヤミンの洞察を基に映画を装置として捉え、映画経験において潜在していた抵抗主体について論究する。宮下寛司はモダンダンスにおける自明視された美的規範の持つ限界を指摘し、それと別様の美学を示す。最後に宮下みなみがムージル『特性のない男』における多様な思想的・社会的モチーフに通底する技術と神秘主義思想の間の関係を考察する。

1. 判子をもらいに行く／失業中である——クラカウアー「職業紹介所について」の装置論的試論

深澤 一輝

1930年にフランクフルト新聞上で公開された「職業紹介所について」というエッセーは、前年に行われたサラリーマン（職員）層についての民族誌的な調査同様、クラカウアー本人によるベルリンでの実地の調査に基づいている。従来のクラカウアー研究はこのテキストについて、当時すでに半ば自明となっていた彼の表層読解的な方法論の表明という側面だけを強調し、そこに記述された内容には深く立ち入ってこなかった。その一方で「装置論」的な関心を持った研究は、たとえば彼の記述した職業紹介所の建築を失業者たちのさまざまな「管理技術」と関連付けて論じ (Roloff 2009)、あるいはこのエッセーを「オフィス装置」について記述したサラリーマン論のパラテクストとして位置付け直している (Arburg 2020)。このような関心を引き継ぐ本発表は、ヴァイマル期の失業保険及び職業紹介の制度を歴史的に輪郭づけながら、職業紹介所への出向という法的に義務付けられていた実践を前景化させ、クラカウアーが暗に指摘する失業者の「主体化＝従属化」の様相を論じる。戦間期の職業紹介装置の中では、失業手当のために紹介所へ「判子をもらいに行く (stempelgehen)」という行為が個人を社会的に且つ自己認識のレベルにおいて「失業者」に変形したと言えるが、それはクラカウアーの見立てによれば支配的な社会体制の「神話化」という効果をも持っていたということが、エッセーの装置論的な読解を通して明らかになるだろう。

2. 恐慌と祝祭——ベンヤミンにおける映画観客群集

菅谷 優

ベンヤミンの『複製芸術論』は、サイレント映画による観客集団の変容を論じた。映像に対する反応を伝播し合う集団は、自ら変容の主体となりうるのである。トーキー映画以後の現状においては、観客のこうした行為主体（エージェント）としての可能性は構築主体（サブジェクト）(藤木 2019)としての振る舞いによって抑圧されている。自らの感想を自由な自己個人から出たものとみなす観客の主体性は、映画装置にあらかじめ構築されたものにすぎないのだ (Hansen 1991)。個人が映画に対していかなる考えを抱こうが、入場料を払っておとなしい鑑賞に終始する限り、そこに装置の作動を超える集団的可能性は生じない。諸装置によって人間が自由な個人という、枠付けられ、網目に絡めとられた存在として形成されるのは、権力が予想外の集団的暴力を恐れるからである (Foucault 1974)。いわゆる熟慮型の公共圏とは異なった、集団的力能の遊戯的発動の機会を、ベンヤミンはサイレント映画を見て笑い合う集団の「神経接続」に見出していた。映画館に集まる観客間の反応の伝播によって、映像の統一と構築主体としての個人は瞬間的に脱措定され、集団的肉体と断片的なイメージとの間に祝祭的な出会いが演じられる。政治の美学化や消費社会における主体性の幻想を揺さぶる即物的な意味での集合と拡散こそ政治であると言い切るところから、ベンヤミン読解にも新たな方向を切り開くことができるのではないか。

3. 舞踊美学の裏面

宮下 寛司

本発表では、戦間期ドイツ語圏において成立し発展してきたモダンダンスの美学が自明視されるにいたる過程を、装置論の観点から分析し、その限界を指摘する。

モダンダンスはそれまで西洋の舞踊において主流だったバレエとは異なる表現を用いて、芸術的メディアとして自律することを目指した。そのために、舞踊家の内面世界を身体運動へと一致させて観客に感得させるような呈示が試みられる。ただ、新たに創出された身振りを理解させるためのコードがもはや存在しないため、この一致を説明するための新たな舞踊美学の理論が求められた。最近の研究が指摘するように、身体運動と内面世界は必ずしも自然に一致するものではなく、運動美学による「共感」をはじめとする当時の多様な言説を拠り所にして理論化され正当化された。すなわち、内面世界を備えると想定される舞踊家という主体と、芸術的客体である身体運動は、上演における観客主体の視線上ではじめて同一化されるがゆえに、舞踊美学は演劇的装置を用いる必要性が生じたのである。

当時の舞踊家たちによる言説や実践および美学的理論を検討し、舞踊の演劇的装置では、身体呈示をめぐる舞踊家の意図と観客受容の間でずれが生じることを指摘する。このずれを埋め合わせようとするコミュニケーションが装置において不断に生じるが、それを相互の内的な「運動」として捉え、舞踊美学の基礎となりうることを示したい。

4. 神秘体験としてのスポーツ——ムージル『特性のない男』におけるスポーツをめぐる近代人の葛藤

宮下 みなみ

ムージルの長編小説『特性のない男』の主人公ウルリヒは、科学技術やスポーツといった、フーコーの言う「装置」に取り込まれている面がある一方、彼の言動にはそこから逸脱も見てとれる。技術者・数学者であるウルリヒは、科学技術が人間の生活様式や認識の方法に新たな風を吹き込んでいくことに積極的な意義を見出す。これは、科学技術という時代の「装置」の要請に従う態度であるといえるだろう。しかし他方、まさに科学技術が基盤としている合理的理性を突き詰めることによってこそ、彼は人間が世界を認識する在り方についてさらに多くの矛盾に突き当たる。同時代の文学作品にしばしば描かれてきた実用主義の行動型人間としての技術者とは異なり、ウルリヒはここでむしろ自らの理性ゆえに迷いを抱え、「装置」の要請に背を向けて成長発展の意義に対して懐疑的な存在として描かれている。シンポジウムの全体のなかで本発表は小説を装置論的分析の対象とし、特に科学技術とスポーツというテーマに着目したうえで、フィクションのなかでこそ構築されうる現実の多角的な捉え方について検討する。さまざまな「装置」が交錯する本作品のなかでも、ウルリヒにとっての科学技術とスポーツが、「装置」のなかでありながら「装置」の統治から逃れ去る契機を含むものであると解釈することで、近代人としての彼の葛藤の内実を具体的に明らかにしていくことが、本発表の目的となる。

口頭発表：語学・ドイツ語教育（14:00～16:35）

B会場（8号館・8201室）

司会：坂本 真一・小林 大志

1. ドイツ語から見たゲルマン諸語の属格修飾語と所有表現——言語の発達サイクルとリサイクル——

清水 誠

ゲルマン諸語の属格はアイスランド語とドイツ語以外で衰退し、脱文法化の過程で再述所有代名詞構文（dem Vater *sein* Haus）と競合して新たな所有表現を生み出してきた。これは言語の発達サイクルの例と言える。たとえば、群属格を許容する英語などの所有格 -s/-'s やドイツ語の無冠詞固有名詞・親族名称につく -s は、前接語に変わっている（Lenas/Mutters Kleid）。再述所有代名詞構文はアフリカーンス語の *se*-構文（*vyf minutesewerk* 5分間の仕事）で高度に文法化し、所有格を駆逐した。ノルウェー語では属格起源の前接語 -s と共存し（den gamlemannen med skjeggets/skjeggets *itthus* 髭の生えた老人の家）、英語の所有格 -s は再述所有代名詞構文を継承した *his*-属格（*Christhis* birth）と強変化属格の混交ともみなされる。フェーロー語は属格の2重表示による「-sa 構文」（強変化属格 -s + 複数属格 -a, *Jákupsabilur* ヨアクプの車）を発達させている。

一方、以前の属格形は複合語の接合要素 -s/-en-、独立属格（*Buddenbrooks*）、「地名 + -er」（*der Kölner Dom* <ケルン[の人々の]大聖堂）に転用された。これは文法形式のリサイクルの例である。

以上の点についてゲルマン語歴史類型論の実践例を示す。

参考：拙著『ゲルマン語歴史類型論研究』（北海道大学出版会 2022 秋刊行予定）

2. 派生動詞の構造複雑化と分布変化

黒田 享

ドイツ語の名詞派生動詞の中には、「装備動詞」として知られる、目的語に基体名詞の指示対象が付与される事態を表すものがある（*bedachen* (< *Dach*), *färben* (< *Farbe*), *überbrücken* (< *Brücke*) など）。*Kühnhold/Wellmann* (1973) や *Kaliuščenko* (1988) によれば接頭辞（特に *be-*）を伴うものが歴史的に増加しており、接頭辞を伴う「装備動詞」形成法の生産性が上昇したことを窺わせる。これはドイツ語にあるとしばしば言われる、語構造の歴史的な複雑化傾向と矛盾しない。上述の研究では異なり語数が中心に議論されているが、そうした手法には生産性を失っても残存する語形成要素を適切に捉えられないなどの問題がある（例えば *Fahrt* (< *fahren*) に含まれる -t）。近年の語形成研究では、コーパスに現れる「孤語（*hapaxlegomena*）」と延べ語数・異なり語数の関係などに基いて生産性を測る手法が主流だが、これを現代と18世紀のドイツ語新聞コーパス（合計約30万語）での装備動詞の分布に適用すると、接頭辞 *be-* を伴う「装備動詞」形成法が接頭辞を伴わない形成法よりも生産性を発達させたと解釈できる。ところが、基体名詞の指示対象が道具として使われる事態を表す「道具動詞」（*filtern* < *Filter*), *pinseln* (< *Pinsel*), *anketten* (< *Kette*) など）の場合は接頭辞を伴う形成法の目立った発達が見られない。語構造の複雑化をドイツ語の一般的傾向と見なすことは難しいだろう。

3. *Gendern* im DaF-Unterricht in Japan: Ein Praxisbericht

Ruben Kuklinski

In jüngerer Zeit setzt sich der Gebrauch geschlechtergerechter Sprache, kurz: *Gendern* in den deutschsprachigen Ländern mehr und mehr durch. Zwar schlägt sich dieser Sprachwandel in den gängigen DaF-Lehrwerken bisher kaum nieder; beim Umgang etwa mit Originalquellen werden die Lernenden jedoch längst mit Formen wie Genderstar („Student*in“) und Doppelpunkt („Student:in“) konfrontiert.

Auf der anderen Seite fehlen für den DaF-Unterricht bisher Anleitungen und Musterbeispiele, wie sich geschlechtergerechte Sprachformen konkret einüben ließen. Aufgrund der engen Verwobenheit von Geschlecht und Grammatik im Deutschen dürften bei vielen Lehrenden weiterhin Zweifel vorhanden sein, ob und wie japanische Lernende *gendertes* Deutsch überhaupt angemessen erlernen können.

Hier möchte der Vortrag ansetzen und an Praxisbeispielen zeigen, wie Studierende auf dem Niveau A1-A2 konkret mit Genus, Geschlecht und *Gendern* im Deutschen umgehen. Dazu werden Seminartexte von Studierenden (Todai, Waseda), die ab dem ersten Semester mit geschlechtergerechtem Deutsch konfrontiert wurden, einer quantitativen Textanalyse unterzogen. Untersucht wird der aktive Umgang mit personenbezogenen Genusmarkern, mit besonderem Augenmerk auf den Einsatz (vorgeblich) generischer Maskulina. Arbeitshypothese ist, dass das so genannte Generische Maskulinum, das im DaF-Unterricht immer noch stillschweigend vorausgesetzt wird, von japanischen Lernenden zunächst künstlich erlernt werden muss. Übergeordnetes Ziel ist die Entwicklung von Unterrichtskonzepten zur Einführung geschlechtergerechter Sprache im DaF-Unterricht der unteren Niveaustufen.

4. ドイツの小学校ドイツ語科の学習指導要領において移民背景を持つ子供の出自言語に付与されている意義の分析

小西 優貴

ドイツでは移民背景を持つ児童生徒の増加に伴う学級の多言語化を背景に、小学校のドイツ語科(=国語科)において、彼らの出自言語(*Herkunftssprache*)を授業に関連づけることが各州文部大臣会議の『教育のスタンダード(*Bildungsstandards*)』(KMK 2005)および各州の学習指導要領において定められている。しかし、先行研究では上記が教育現場においてほとんど実践されていないことが指摘されている(Bredthauer 2018)。この現状に関しては、教員養成や教科書の内容が問題視されることが多いが、それらの基盤をなす上記の教育政策文書の内容やその妥当性については断片的に言及される程度で、詳細な調査や分析は行われていない。

そこで、本研究ではドイツ各州の小学校ドイツ語科の学習指導要領を対象とした内容分析を行った。本発表では、その結果として、出自言語をドイツ語科の授業において関連づけることに(1)言語意識(*Sprachbewusstheit*)の育成、(2)異文化間教育への活用、(3)移民背景を持つ児童生徒のアイデンティティの強化、(4)ドイツ語学習のリソースの4つの意義が付与されていることを示す。また、州ごとの傾向の分析から、(3)、(4)の側面が一部の州でしか扱われていないことを明らかにする。そして、出自言語がドイツ語の授業のリソースとして扱われることで移民背景の児童生徒のアイデンティティが強化され、それが授業参加を促進するとする理論的な議論(Oomen-Welke 2019)を根拠に、この点を今後のドイツの小学校ドイツ語科教育政策が改善すべき課題として指摘する。

ブース発表 (14:40~16:10)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

C会場 (8号館・8202室)

YouTube を活用したハイブリッド型授業構築の試み——コロナ後の初修外国語教育の可能性を探る——

川村 和宏
熊谷 哲哉

本発表では「独学・独習の可能性として YouTube 動画作成が有効である」というテーマを主張したい。本発表の発表者のうち熊谷は 2017 年からドイツ語教育のための YouTube 動画を作成している。他方で川村は 2020 年から 100 本以上の動画を作成してドイツ語の授業に導入している。発表者 2 名の動画はいずれも最も再生数が多い動画では 1 本あたり 1 万 8 千回以上再生されている。発表者自身が実際に YouTube の動画コンテンツを作成、配信し、授業に活用した経験を踏まえて、ドイツ語教員が YouTube 動画を作成する意義と課題、コロナ後の教育において有する可能性を提示したい。

具体的な発表内容は、1) 動画作成の実例と技術的な方法の紹介、2) YouTube 動画を活用した授業実践事例の報告を中心とする。

現在文部科学省により「GIGA スクール構想」が推進されており、小中学校において ICT 教材が活用されつつある。ICT 世代の学習形態に対応するべく、独習コンテンツとしての動画配信の需要は今後より一層増すと予想される。さらに、広報媒体としても他言語に先駆けた動画配信の試みが求められている。そこで、本発表の最後には発表者それぞれが実施した授業アンケートの結果も踏まえつつ、YouTube 動画に代表される「ユニバーサルな教材の意義」およびドイツ語関連動画の「広報媒体としての側面」といったテーマについて議論したい。

ポスター発表 (13:00~14:30)
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

D会場 (10号館・X201室)

Vergleich der Interessensbekundungen Studierender vor und nach Beginn der Corona – Pandemie und Vorstellung von SRS-Lernapplikationen

Lars Bauer

Mit der Corona-Pandemie kamen viele digitale Technologien auf den Tisch, die es schon seit langem gibt, die aber bisher nicht für jedermann relevant waren. Die Nutzung dieser Technologien im Arbeits- und Lernalltag veränderten womöglich auch unser generelles Interesse gegenüber digitalen Hilfsmitteln. Ob dieses Interesse auch für artverwandte Technologien des E-Learnings bzw. M-Learnings gilt, habe ich in einer Studie zu Sprachlernapps untersucht.

Die vorliegende Poster-Präsentation beschäftigt sich dabei im Detail mit dem Thema SRS-Lernapplikationen (Lernsysteme, die nach dem *Spaced Repetition System* basierend auf Algorithmen funktionieren) und hat zur Absicht einen Vergleich von erhobenen Daten zum generellen Interesse an Lernapplikationen durch Studierende vor und nach Ausbruch der Corona-Pandemie zu erläutern. Die vorzustellenden Daten zeigen dabei das generelle Interesse Studierender am Thema auf und beleuchten die Entwicklung der Interessensbekundungen im Laufe der Corona-Pandemie. Anhand einer quantitativen Analyse der Daten soll die These untermauert werden, dass aufgrund der Pandemie und dem damit einhergehenden Fernunterricht sich das Interesse an digitalen Lernmöglichkeiten unter Universitätsstudenten gesteigert hat.

Außerdem möchte ich, zur Verbindung von Theorie und Praxis, leicht in den Unterricht integrierbare Lernapplikationen vorstellen und auf diesem Weg einen Beitrag zur Verbreitung derartiger Lernsysteme in die (unterrichtende) Praxis leisten.

E会場 (10号館・X204室)

Verwendung von YouTube-Videos im japanischen Deutschunterricht

Axel Harting

Die Nutzung digital verfügbarer Lernressourcen hat durch die Corona-Pandemie einen großen Aufwind erfahren. Um das Potenzial der Videoplattform YouTube für den Deutschunterricht in Japan zu ermitteln, wurde mit Deutschlernenden (GER A1 bis B1) der Universität Hiroshima eine Umfrage (n=110) sowie eine qualitativ orientierte Fallstudie zum didaktischen Einsatz von YouTube-Videos durchgeführt. Im Rahmen der Befragung hat sich gezeigt, dass ein Großteil der Lernenden eine sporadische Verwendung von YouTube-Videos im Deutschunterricht begrüßen würde, insbesondere zum Training des Hörverständnisses, der Aussprache sowie zum besseren Verstehen der Umgangssprache. Allerdings wurden auch Bedenken bezüglich der Trennung zwischen lernbezogener und privater Nutzung der Videoplattform zum Ausdruck gebracht.

Der konkrete Einsatz von YouTube-Videos im Unterricht wurde im Rahmen eines Projektes in einem Landeskundekurs mit drei Lernenden (GER B1) evaluiert. Dabei suchten die Lernenden Videos zu vorgegebenen Themen, teilten diese über ein Lernmanagementsystem miteinander und diskutierten deren Eignung für das Deutschlernen. Dadurch konnten die Lernenden ihre eigenen Interessen bezüglich der Zielsprachenländer mit einbringen und im kritischen Umgang mit authentischen audio-visuellen Lernmaterialien geschult werden. Die bisher aus dieser Studie hervorgegangenen Erkenntnisse sollen einen Erfahrungsaustausch mit anderen Deutschlehrenden bezüglich der Nutzung von Videoplattformen anregen und Anreize für meine weiteren Forschungsaktivitäten in diesem Bereich schaffen.

第2日 5月8日(日)

シンポジウムⅡ(10:00~13:00)

A会場(8号館・8101室)

発話を越えたところに及ぶ文法の可能性：話し手指向性と聞き手指向性

司会：森 芳樹

全体要旨

本シンポジウムで問題とするのは、発話およびそれを越えたところに及ぶ文法の可能性である。

語用論はしばしば「言語学におけるくずかご(“waste-basket”)」(Mey 2001: 19, Bar-Hillel 1971) と称されるように、伝統的に文法とは独立して扱われることが多い。語用論の端緒を開いたことで知られる Morris (1938: 6) は語用論を、言語を使用する人間に焦点を当てたものと位置づけており、Chomsky (1980: 59) は語用論を言語機構 (language faculty) とは別の領域に置いている。

しかしながら、近年、談話的・語用論的概念を積極的に文法理論の中で扱う分析が盛んに提案されるようになった。意味論の分野では、Potts (2005) が慣習的含意 (conventional implicature) の意味を構成性原理に基づいて導出できるような形式意味論の枠組みを提案し、Gutzmann (2015) はその枠組みを拡張して文モードや心態詞も扱える理論を提案した。統語論の分野では、Speas&Tenny (2003) が話し手・聞き手を擁する Speech Act Phrase を左方領域に導入することを提案し、統語論と意味論のインターフェースにおいては、Krifka (2020, i. E.) により、文の左方領域に Act Phrase や Commitment Phrase、Judgement Phrase といった機能範疇を想定し、発話状況や談話機能を参照するような理論が提案されている。

こうした研究動向を背景にして、本シンポジウムでは、話し手・聞き手・評価者などの語用論的概念に関わる言語事象の分析を通し、発話、そしてそれを越えた文法の可能性を探る。議論の対象とするのは主にドイツ語であるが、日本語についての発表を加えることで、より汎言語的な談話における文法を明らかにすることを目指す。

各発表は以下のように計画されている。伊藤&森は、ドイツ語の副詞節および補文の統語構造と意味論を取り上げる。Frey (2011) によって提案されたテストに基づき、ドイツ語の副詞節および補文を分類したうえで、それぞれの統語構造および意味論を提案する。特に文の左方領域における意味論に着目し、談話的意味を統語構造に基づいた形式意味論によって説明することを試みている。藤井はドイツ語の命令文の分析を通して、談話参与者である聞き手が統語的に担う機能を明らかにする。真正命令文では聞き手が必ず主語の指示対象に含まれることが知られているが、聞き手と主語との関係に於いて異なる振る舞いを見せる非動詞命令文との比較分析をすることで、聞き手を統語的に組み込む仕組みを説明する。宮田は、評価・感情を表すモウと感嘆文の比較を行うことによって、第2発表と第4発表の橋渡しを担う。本発表は、命令文と同じ表出的な文タイプである感嘆文を意味論の立場から扱うことで、第2発表の補強を行う。また、日本語の評価者が関わる構文を見ることで、第4発表でのドイツ語の評価者項との対照を行う。高畑は、ドイツ語の *sein + zu* 不定詞構文において現れる *für-PP* を当該構文の評価者依存性の点から分析する。主に形容詞について議論されてきた評価者依存性を不定詞句に拡張することにより、評価者および経験者の統語的・意味的性質を明らかにすることを目指す。

1. ドイツ語の副詞節および補文の統語構造と意味論

伊藤 克将・森 芳樹

Frey (2012) によって示されているように、ドイツ語の副詞節は、①副詞節内における代名詞が主節の量化子に束縛されうるか、②副詞節が主節の否定の作用域に入ることができるか、③文アクセントのない主節と組み合わせることができるか、④副詞節が主節の疑問の作用域に入ることができるか、⑤副詞節単体で疑問文に対する答えとなることができるか、⑥副詞節内に心態詞の生起を許すか、という観点で分類したとき、①～⑤のいずれも不可であるが⑥を許すものと、①～⑤のいずれも可能であるが⑥を許さないものの 2 種類に分けることが可能である。Frey (2012) はこれらの振る舞いの違いを Force P の有無に還元することを提案したが、この分析はその対象を補文にも拡張した場合には問題が生じる。態度述語に埋め込まれた補文（態度補文）は⑥を許す（つまり心態詞の存在を許す）のに対し、事実性述語に埋め込まれた補文（事実性補文）は⑥を許さない（心態詞の存在を許さない）。それにもかかわらず、態度補文と事実性補文は共に①～⑤のいずれも可能となっているのである。本発表では、①～③に関しては統語的な付加位置によって説明が与えられる一方、④および⑤に関しては意味論的な分析が必須であることを示し、Ito & Mori (2016)、伊藤 (2019)、Ito (to appear) などで提案されている Speech Act Phrase の意味論を用いて形式意味論による分析を提案する。また、⑥に関しては Frey (2012) と同様に、Force P の存在にその可否を帰すことが可能であると主張する。

2. ドイツ語命令文に於ける聞き手の統語的実現

藤井 俊吾

Portner (2007) は聞き手の to-do list への属性の追加を話者が要求することが命令文の機能であるとしたが、文中で聞き手が主語として義務的に実現するかは命令文の種類によって異なる。Isac (2015) が指摘するように、命令形動詞を用いた真正命令文では必ず聞き手が主語の指示対象に含まれるが、「接続法」動詞等を用いた代替命令文では聞き手を含まない 3 人称主語が容認される。Isac (2015) は真正命令文の主語は左方領域の Speech Event head と一致し、その主格が認可されるとした。しかし命令の意味が C の素性によって付与されるとする Han (2000) のような立場をとる場合、同じく命令を表現しながら主格名詞句が認可されない verblose Direktiva (VD, cf. Jacobs 2008) や名詞句命令文 (cf. Iatridou 2021) は Isac の分析にとって問題となる。

本発表は聞き手が左方領域に統語的に導入されるとする Theorie der Sprechaktphrase (Speas&Tenny 2003, Hill 2007, Ito & Mori 2016, Miyagawa 2017 及び伊藤 2019) を採用し、聞き手が命令文で担う役割を明らかにする。真正命令文では high Mod を介した聞き手と動詞の一致が起きるのに対し、「接続法」動詞は high Mod と一致する素性を持たないため、聞き手を含まない主語が認可される。命令を表わす VD は high Mod を持たないために否定詞を認可せず、また聞き手と主題項との一致が起きないために聞き手以外の主題項が認可される。名詞句命令文では音形のない行為者/主題項が聞き手と一致することで、聞き手は事態実現義務を負うだけでなく、行為者/主題項として解釈される。

3. 日本語の副詞モウの超過用法と感嘆文

宮田 瑞穂

本発表では、(1)のモウの「超過用法」を、(2)の感嘆文と比較し、両者は共通して被修飾部の形容詞が導入する程度尺度を拡張 (widening) する (Zanuttini&Portner 2003) ことによって甚だしさを表すことを主張する。

- (1) ジョンはそれはもう大きな車を買った。
- (2) ジョンはなんて大きな車を買ったのだ (ろう) !

超過用法のモウは、渡辺 (2002)、全 (2015) などと言及されているが、どちらも「驚き」や「限界を超えた状態」を表すなど、語用論的な説明に終始している。よって、本発表では、感嘆文の分析を応用することによって、モウの超過用法を理論的に説明する。Zanuttini&Portner (2003) によると、感嘆文は *wh* 語によって導入される命題の集合が拡張されることによって、程度の甚だしさを表す。モウの場合、被修飾部の尺度を参照しつつ、新たな尺度を構築し、その尺度を文解釈の慣習的含意として導入する機能 (宮田 2022、cf. Löbner 1989) を持つ。その機能により、感嘆文と同じく、被修飾部の形容詞が導入する程度尺度が拡張されることによって、形容詞の表す程度が話し手の期待を超えているという尺度含意を表す。

加えて、超過用法のモウと感嘆文の相違点、聞き手が関わるか否かという点である。感嘆文は、話し手指向の表現 (Honda 2014) であることが論じられている。一方で、疑問文の応答などのデータから、モウの超過用法は聞き手指向の表現であり、話し手である評価者と、聞き手の2つのオペレーターが必要とされると主張する。

4. ドイツ語の *sein + zu* 不定詞における経験者項

高畑 明里

(1) に示すようなドイツ語の *sein + zu* 不定詞構文では、可能のモダリティを表わす場合に、不定詞の論理主語が *für-PP* によって導入される (Höhle 1978)。

- (1) Die Aufgaben sind für uns leicht zu lösen.

このような *für-PP* については、先行研究で経験者との結びつきが指摘されているが (Holl 2001: 236, Demske 1994: 258-263)、その具体的性質や、何により認可されているのかは明らかでない。本発表では、(1) の *sein + zu* 不定詞構文の評価者依存的 (Judge-variant) な性質に着目し、(1) の *für-PP* が評価者と同定されると主張する。*sein + zu* 不定詞の可能のモダリティは、主語となる内項に何らかの内在的性質 (Disposition) を付与する (Holl 2010)。例えば (1) は主語の「課題」の持つ「簡単に解ける (ほど易しい)」といった内在的性質を表しており、このような内在的性質が評価者依存性を持つ。また、*für-PP* のような項について、Bylinina (2014, 2017) は、経験者項として評価者とは独立に想定すべきだと主張している。本発表では、同様に評価者依存性を持つ *sein + zu* 不定詞構文の義務解釈の場合には *für-PP* が認可されないことより、Bylinina (2014, 2017) の主張が支持されることを示す。一方で、Bylinina (2014, 2017) の主張する経験者と評価者が同定されるという制約については、(2) のように *finden* に *sein + zu* 不定詞を埋め込んだ際、主語と指示の異なる *für-PP* が現れうることをもとに、評価者と経験者が一致しない場合があることを指摘する。

- (2) Ich finde diese Aufgabe auch für ein Kind zu lösen.

口頭発表：文学 I (10:00～11:55)

B 会場 (8 号館・8201 室)

司会：新野 守広・馬場 大介

1. 初期ドイツ語圏のサイエンス・フィクション (SF) における物語られた出来事の連続と時空間——ルートヴィヒ・アンツェングルーバーの暦物語『石割りハンスのメルヒェン (Die Märchen des Steinklopferhanns) 』 (1874/1880) を例に

徳永 菜摘野

SF というジャンルの確立前に成立し、現在では SF と見なされうるドイツ語圏文学を本発表では初期ドイツ語圏の SF と呼ぶ。学界でのドイツ語圏 SF の理論的研究の開始は、1950、60 年代のユートピアの形式分析だった。1970 年代になるとイデオロギー的な分析が興隆し、1980～2000 年代にはテーマ別の概説と先行研究の研究書により、隣接する他ジャンルとの区別を意識した定義の洗練化がなされた。そして 2010 年代にはこのジャンルの包括的な文学史が発表された。だがドイツ語圏の SF 研究では物語論的考察が尚不十分である。それ故、本発表はルートヴィヒ・アンツェングルーバーの『石割ハンスのメルヒェン』第 2 部を例に SF の物語論的分析を試みる。SF の物語論は①物語られた出来事の連続、②それが生じる特別な時空間、③作中人物描写で構成されるが、本発表では①と②に焦点を絞る。第 2 部の枠内物語「機械の話」は時間旅行がテーマである。機械という時間旅行の手段や空間化された時間は科学的な世界観に依拠している為、この物語は信憑性、合理的な認識・理解可能性を持ちうる。しかし他方で、物語られた出来事の連続の因果や継起は、読者の経験や他の文学ジャンルにおけるそれらと比較すると、異質で嘘くさい。物語のもっともらしさと虚構を巡る本作のこうした矛盾はジャンル自体のあり方への自己言及となっている。

2. 『ツァラトゥストラ』におけるニヒリズムの問題——超人と永遠回帰思想をめぐる一考察——

網谷 優司

『ツァラトゥストラ』において、ニーチェのニヒリズム思想は「同一物の永遠回帰」として示される。遺稿では「永遠回帰思想」は「ニヒリズムの極限形式」とされている。ツァラトゥストラは、永遠回帰を肯定する者として「超人」を提示していた。

戦後のニーチェ研究史において超人概念への注目は少ない。おそらく、この概念が物語形式でのみ登場するため、「哲学者」には扱いつらかったのだろう。超人がヒトラーに重ね合わせられ、国民社会主義のイデオロギーを支えてしまったという反省もあった。その傾向は今も続いており、今日のニーチェ研究をリードするレジンスターにおいても超人についての言及は少ない。しかし、永遠回帰思想がニヒリズムの極限形式である以上、超人概念を無視することはできない。よって、本発表では超人について考察したい。その際に参照するのは、「実験」という概念である。

永遠回帰思想は、すべての過去に対する「我がかく欲した」という形での肯定を要求する。しかし、例えば自然災害などを主体的に肯定することをニーチェが要求していたならば、彼の思想が今日有している価値は乏しい。そこで、本発表ではニーチェにおける実験概念に照らして、『ツァラトゥストラ』は彼の思考実験であったことを主張する。この主張を採用すれば、超人の到来をニーチェの実践的要求と捉える必然性はなくなる。永遠回帰の肯定は、およそ人間業ではない。だからこそ哲学者ニーチェは物語作品の中で試みにその営為を「超」人に託したのではないか。

3. 「父の不在」の不在——ペーター・ヘルトリング『ヘルダーリン』の伝記批判的方法

益 敏郎

日本ではとくに児童作家として知られるペーター・ヘルトリング (Peter Härtling, 1933-2017) だが、彼は数多くの伝記小説も残している。本発表はその伝記小説の代表作であり、昨年邦訳も発表された『ヘルダーリン (Hölderlin)』(1976年)を扱う。

ヘルトリングの伝記小説は、事実と虚構の問題をいくども批判的に内省する点に大きな特徴があり、『ヘルダーリン』についても主にこの観点から研究されてきた。しかしこの伝記批判的方法はより精緻に考察される必要がある。なぜならその眼目は、ジャンルの実験的な脱構築ではなく、むしろ「生の記述 (Bio-graphie)」という伝記の本義に立ち返って「生」を取り戻そうとすることにあるからである。そしてこの「生」の問題は、ヘルトリングがどのようなヘルダーリンを、従来の言説に対して提示したのか、という点から明らかにすることができる。

論点は二つある。まずはヘルダーリンをめぐる従来の言説を、「父の不在」言説として把握することである。ヘルダーリンは文学、哲学、政治、精神分析の分野で多様に受容されてきたが、常に「父」——現実の父、師と仰いだシラー、ギリシアの神々、キリスト教の神、詩や革命の理想——を求める情熱と、その「不在」に苦悩する分裂状態において理解されてきたのである。二つ目の論点は、作中でヘルトリングがシュヴァーベン方言を再現し、ヘルダーリンと関係を持った女性たちの失われた声を再創造したこと、そしてこれが「父の不在」言説が排除してきたヘルダーリンの親密圏を満たす意味を持つことである。本発表では、これをさらに当時の時代状況や他の文学作品との関連から考察する。

口頭発表：文学Ⅱ (10:00～11:15)

C会場 (8号館・8202室)

司会：吉田 治代・松原 文

1. Das fremde Irren, das sind wir – Robert Musils *Der Mann ohne Eigenschaften* und Gerhard Roths Werkzyklen als Schwellenkunde einer stummen Verrücktheit zwischen literarischem Wahn und primitivem Sinn

Manuel Kraus

Der Beitrag untersucht die literarische Konzeption des Wahns in *Der Mann ohne Eigenschaften* von Robert Musil sowie in *Die Archive des Schweigens* und *Orkus* von Gerhard Roth. Auch wenn sich in der Forschungsliteratur über Musil keine konkreten Hinweise zu einer Rezeption der Werke geisteskranker Künstler finden, die Parallelen zu den von Roth rezipierten Publikationen von Hans Prinzhorn, Walter Morgenthaler oder Leo Navratil sind umso sichtbarer und weisen auf eine psychologische Kunstauffassung hin, „die es eigentlich schon immer gegeben hat, die aber als eigenständige Kunst“ (Feilacher 1995: 57) zumindest zu diesem Zeitpunkt „nicht anerkannt“ (Ebd.) war. Die Begeisterung für den literarisierten und z.T. sakralisierten Wahn sowie der sich aus diesem Wahn erschließende Selbstbezug verbindet das Werk von Musil und Roth und legt eine längst überfällige komparative Analyse nahe.

Der Beitrag erörtert dabei die Frage, inwiefern der geschilderte Wahn als Ausdruck des „archaisch-primitiv[e]n Denken[s]“ (Navratil 1976: 48) sowie als „Wunsch, sich beim Schreiben selbst auszulöschen“ (Roth in Heinrichs 2015: 53) dient, um „das Leben aus dem zu befreien, was es einkerkt“ (Ebd.: 82). Schizoide Protagonisten oder wahnbehaftete Kippfiguren zwischen

„subjektiver Innerlichkeit und objektiver Wirklichkeit“ (Ziolkowski 1994: 194) fungieren bei Musil und Roth – so die These – als signifikanter Schlüssel für die primitiven Ursprünge der eigenen in der fremden Welt. Erst so wird die Schwelle zwischen literarischem Wahn und primitivem Sinn als „schizophrenes Weltgefühl“ (Prinzhorn 1922: 347) sichtbar, indem der „Wahnsinn als die Gegenseite einer scheinnormalen Welt“ (Roth in Heinrichs 2015: 88) dient und die „Künstler nichts anderes als Übersetzer des Wahns in die Normalität [sind]“ (Ebd.).

2. Koloniale Erinnerungskultur. Kalendergeschichten aus der Südsee

Thomas Schwarz

In Deutschland erschienen zwischen 1889 und 1942 verschiedene illustrierte Kolonialkalender. In ihnen wird der Kolonialismus als emotionales Regime greifbar, das den Habitus der Kolonisatoren als einen emotionalen Stil zu prägen sucht. Ein Volk ohne Kolonien wäre in diesem Diskurs ein Volk ohne ‚Ehrgefühl‘.

Analysiert werden ausgewählte Reiseberichte und literarische Erzählungen über die deutschen Kolonien im Pazifik. Der erste Teil des Vortrags untersucht, wie sich das rassistische Herrenmenschtum einer militärtechnisch überlegenen Kultur gebärdet, wenn die Kolonisierten Widerstand leisten. Der zweite Teil geht auf die Kolonie Samoa ein, auf die der deutsche Kolonialismus erhebliche libidinöse Energien konzentrierte.

Das deutsche Ausgreifen in den Pazifik ist in der Forschung mit Götz Alys Buch *Das Prachtboot. Wie Deutsche die Kunstschatze der Südsee raubten* (2021) in den Brennpunkt der Öffentlichkeit gerückt. Die These des Vortrags ist, dass sich die Kolonialkalender um die Bildung einer kolonialen Tradition bemühten. Sie versuchten, eine Erinnerungskultur zu etablieren, die während der historischen Phase des Kolonialrevisionismus von der Kultivierung eines nostalgischen Phantomschmerzes abgelöst wurde, eingedenk des Verlusts der Kolonien im Ersten Weltkrieg. Die Bewahrung des im Krieg verlorenen Kolonialreiches im kollektiven Gedächtnis der Deutschen war wohl die wichtigste Funktion der Kalender.